立原正秋全集

第十卷

立原正秋全集

第十巻

角川書店

立原正秋全集　第十巻
昭和五十七年八月十二日初版発行

著　者　立原正秋
発行者　角川春樹
印刷所　新興印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七一一一（大代表）
振替東京三―一九五二〇八　〒一〇二

Printed in Japan 0393-573410-0946(0)
落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集　第十巻　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

冬の旅……五
夏草……四八五
解題　武田勝彦　五〇九

冬の旅

別れ霜

護送車の金網ごしに見える外界の新緑が眩しかった。外の景色を眺められるのはほぼ一か月ぶりだな、と宇野行助は移り行く風景を新鮮な思いで受けとめた。新緑にまじって家々の庭に赤い躑躅の花も咲いていた。それらの樹木に、早い午前の陽の光が砕け散っていた。白い壁の家も見えた。壁の白さが目にしみた。四週間を鉄格子のなかで暮してきた行助に、それらの風景は彩りがありすぎ、感動的ですらあった。

「ちえッ、娑婆では花が咲いてらあ」

と誰かが言った。護送車のなかには七人の少年がのっていた。

「ほんとだ。あかい花と白い花が咲いているぜ。とにかく外には色があるなあ」

と行助のとなりにいる少年が応じた。この少年の言葉はいくぶん詠嘆的で、金網ごしの外界にたいする羨望がこめられていたが、ちえッ、と軽くさけんだ少年の態度には反抗の響きがあった。

行助は仲間のやりとりをききながら、なぜ俺は少年院送りになったのか、と自分の内面を視つめていた。彼は、他の少年達のように詠嘆的にも反抗的にもなれなかった。

「練鑑できいた話だが、俺達がこれから入る多摩少年院は、少年院のなかの学習院だとよ」

ちえッ、とさけんだ少年が言った。
「学習院とはわらわせるな」
外には色がある、と言った少年が答えた。
「おまえ、いやに大人ぶっているが、なにをやったんだ？」
「窃盗よ。おめえは？」
「俺は盗んだのさ」
「おたがいにたいしたことはしていねえな。奴はなにをやったのだろう。奴の方が俺より大人ぶっているぜ」
「きいてみろよ」
「おい、おまえ、なにをやったんだ？」
外には色がある、と言った少年が行助の肩をたたいた。
「俺は人を刺した」
行助は外を見たまま面倒くさそうに答えた。すると二人は一瞬だまりこんだ。
「おめえ、いやに貫禄があるように見せかけるが、相手のどこを刺ったんだね」
外には色がある、と言った少年が、再び行助の肩をたたいた。
「それがきみとなんの関係がある？　うるさいからすこし静かにしてくれ」
行助ははじめてその少年の方をふり向いて答えた。
「きみだとよ。おめえ、目白の学習院出身か。いやに雅た言葉を使うじゃねえか。おい、みんな、きいたか。奴は、おめえ、とよばずに、きみ、と俺を尊敬してよんだ。奴は、目白の学習院で学術優秀、品行方正のお免状をもらい、これから多摩少年院に進学するところだ」
すると他の者が声をたててわらった。わらい声に、運転席のとなりに掛けている法務教官が窓をあけてこっちをみた。少年達はいっせいに姿勢を正した。やがて窓が閉った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「俺は宇野行助という。きみの名は？」
行助はとなりの少年を見て訊いた。
「俺は安坂宏一だ」
と少年は軀を前にのりだすようにして行助を見かえして答えた。少年達は二列に並んでむかいあって腰かけていた。行助が見ると、少年は、左手の薬指の背に、幾子、と刺青がしてあった。
「安坂宏一か。憶えておこう」
「通称を安という。俺はすじもんだ」
「すじもん？」
「おまえ、堅気の学生だな。すじもんとはやくざのことよ」
「そうかい」
行助は再び金網ごしに外に視線を移し、この少年は俺より二つは年嵩だな、と思った。行助は少年鑑別所では独居房にいた。独居房は畳の部屋で、そこにベッドがおいてあり、本とラジオとテレビが備えつけてあった。しかし彼はラジオも聴かなければテレビも視なかった。
彼が、傷害事件をおこして世田谷の成城警察署から家庭裁判所を経て東京少年鑑別所に送られたのは、四月初旬であった。公立高等学校の二年生に進級し、学校に通いだしてから幾日も経たない日であった。彼は、鑑別所に高等学校の教科書を差しいれてもらい、それを自習しながら鑑別期間の四週間をすごしたのであった。その間、彼は、少年鑑別所と家庭裁判所を二度往復した。
その結果、中等少年院に送致、と審判されたとき、これで俺の進路はある程度変ってしまった、とはっきり感じた。後悔はなかったが、為体の知れない苦いものがこみあげてきた。
少年鑑別所長は平山亮という五十がらみの人で、親切だった。所長は、相手を刺した行為はもちろん悪いが、刺した動機が大切だから、それをきかせてもらいたい、と何度も行助を諭すように言ってくれたが、彼は最後まで動機を

語らなかった。
「おい、刺した相手はどんな奴だった？」
再び安坂宏一が行助の肩を叩きながら訊いた。
「だまっていてくれないか」
行助は迷惑そうに答えた。
「だまっていろだと？　おい、俺は二度目の少年院入りだ。判らないことがあったら教えてやろうと言っているんだ」
「教えてもらわなくともいい。きみは少年院行きに慣れているんだな」
「慣れているだって？　おい、冗談おっぺすなよ。俺は好きこのんでこんな車に乗っているわけじゃねえ。情婦が子供を孕みやがってよ、金が必要になってな……」
「きみいくつだい？」
行助は訊いた。彼も情婦をまぶと呼ぶ隠語ぐらいは知っていた。
「番茶も出花の十八よ。女は二十だ。ちくしょうッ！　もう、ごらんがうまれる頃だというのに、俺は刑務所入りだ。奴、どうしているのかなあ」
行助は安坂の言うのをききながら、この少年は案外気がいいのかも知れない、と思った。そして彼は再び外の新緑に目を移し、兄を刺した日の午後を想いかえした。それはまことに気の遠くなるような午後であった。
それは、悪夢のような半日であった。行助は、いまでもその半日の陽のながさを憶えている。
高等学校は世田谷の粕谷町にあった。学校からは芦花公園がちかかった。行助の家は、成城町の北のはずれにあり、祖師谷と調布市に隣接していた。彼は、粕谷町の学校に通うのに、歩いて祖師谷を通りぬけた。いつも安穏寺という寺の前を通った。彼は寺が好きだった。寺には想い出があった。父の矢部隆の骨を埋葬しに行った五歳の春、母の澄江が泣いていたのを、彼はながく記憶にとどめていた。その寺は鎌倉の円覚寺であった。小学校の四年生になったと

しの春、再婚する母につれられて東京に越してくるまで、彼は年に数回母とつれだって円覚寺の父の墓所に詣でた。いま、彼の記憶にあるのは、季節の色に染まった円覚寺の境内である。東京に越してきたこの九歳の春いらい、彼は円覚寺を知らなかったが、しかし彼の裡では季節の色に染まった寺の周辺が生きていた。真白く粉を噴いたような五月の木の芽、蟬しぐれの夏の午後、樹木から一枚いちまい葉が剝がれて行く十一月のしずかな暮方……彼は東京に越してきてからも、いつもそんな季節感を求めては寺のそばを歩いた。しかし東京には円覚寺のような寺はなかった。

安穏寺は小さな寺であった。しかし寺のたたずまいはいつも彼の心をやわらげてくれた。この日、彼は午前中で授業を終え、いつものように安穏寺の前を通って帰宅した。腹がへった、なにかこしらえてあるだろう、と思いながら玄関をあけたとき、奥から母のさけび声がきこえてきたのである。

行助は咄嗟に式台にカバンを投げだし、廊下を奥に走った。そして茶の間の襖をあけたとき、彼は息をのんだ。

兄の修一郎が母の上にのしかかっていたのである。澄江は髪をふり乱し両腕を修一郎の胸に突きあげて抵抗しており、着物をまくられた下半身があらわだった。あり得ない光景であった。行助は見てはならぬものを見た、という思いと、修一郎にたいしての怒りが噴きあげてきた。修一郎がなにをしようとしているのかを瞬時のうちにさとった行助は、いきなり修一郎の頭をうしろから殴りつけ、首に腕をまわして引きずりおろした。

「野郎ッ！」

修一郎は行助の腕を振り放すと台所に駈けて行き、右手に出刃庖丁をにぎってきた。

「ちくしょうッ、母子で俺を馬鹿にしやがったな！」

酒のにおいがした。

行助は、ジーパンに色もののシャツ姿で出刃を握って戻ってきた兄をみたとき、これで血の繋がっていない二つ違いのこの兄とのあいだもおしまいだな、と感じた。出刃庖丁を向けられて恐怖はなかったように思う。行助の心に充ちてきたのは崩壊感覚であった。そこに微かな哀しみがともなった。

「修一郎さん、やめて！」

澄江が両手で自分の頭を掴みながら叫んだ。
「うるせえッ、てめえ達は俺とは他人だ！」
修一郎がさけびかえした。修一郎と行助のあいだには卓袱台があるきりだった。
行助は、いつかはこんな日が訪れてくるのを、心のどこかで知っており、それを虞れていた。ことのきっかけはなんでもよかった。血の繋がっていないこの兄と、取っくみあいの喧嘩をしたことはない。いつも陰にこもった争いをしてきた。争ったといっても、行助の方から争いを仕掛けたことはない。いつも、修一郎の一方的な言いがかりを、行助は母といっしょにだまってきいてきただけであった。
修一郎は、この三月に、近くの私立高等学校を出て、神田のある私立大学の経済学部に、二百万円の金をつんで裏口入学をしたが、ここまで修一郎を堕落させたのはもちろん父の宇野理一であった。理一も修一郎も、それを堕落だとは考えていないほど、都会の消費生活に慣れきっていた。
行助は、兄が金で裏口入学した件については、母と話しあったことはない。ただ、母が、父の依頼でその私大の理事の家に金を届けに行ったことだけは知っていた。
しかし、このきっかけは余りにもひどいではないか、と行助は乱れた着物を直しながら修一郎を宥めている母を見て思った。血が繋がっていないとはいえ、母子ではないか。
「兄さん、庖丁をおろしてくれ」
行助は哀しかった。
「俺はおまえの兄ではない！」
修一郎はあきらかに理性を失っていた。やはり酒のにおいがした。母を犯そうとした現場を見られ、彼は逆上していた。劣等感の捌けぐちを刃物に託していた。行助は修一郎のそんな面を知りすぎるほど知っていた。
「修一郎さん、やめて！」
澄江がおろおろしながらもう一度言った。

「うるせえッ。てめえはこの家の女中じゃないか。俺のおふくろのような面をするなッ！」

行助が卓袱台に右足をひっかけて両手で持ちあげ、それを修一郎に投げつけたのは一瞬の出来事であった。修一郎が庖丁を畳におとし、修一郎と行助の腕が同時に庖丁にのびたが、行助の方が早かった。二人は庖丁を奪いあって縺れた。そして、庖丁がどうして修一郎の右腿に刺さってしまったのか、行助はまったく憶えていない。

修一郎は異様なさけび声をあげて部屋から庭にとびだすと、この四月に理一から買ってもらったベンツに乗り、やはり異様なさけび声をあげて出て行ってしまった。

気がついてみたら行助は右手に出刃を握っていた。不思議なことに出刃には血がついておらず、畳に血が散っていた。

「行助……どうして、こんなことを……」

澄江はべたっと坐りこんでしまった。行助が見ると澄江のくちびるがふるえていた。行助はこのとき畳に散っている血を視つめながら冷静だったように思う。刺そうなどという気持はまったくなかった。しかし現実には刺していた。何故か？　修一郎にたいしての憎しみが、無意識のうちに行為になって出てしまったのか……。

「お母さん、警察に電話をしよう」

「おまえ……そんなことを！」

澄江は息子の足もとににじり寄った。

「それで、おまえ、刺した相手が死んだわけじゃあるめえ。もっとも、ろくっていりゃ、いま頃、学習院になど送られるはずがねえものな」

再び安が話しかけてきた。

「きみは二度目の少年院入りだと言っていたが、やはり多摩に入ったのかい？」

行助はこの少年にすこしばかり親しみを覚え、訊きかえした。

「いや、千葉よ。初等少年院といってな。三年前だ。ああ、ああ、また麦飯を食ってくらすんだ。いやんなっちゃうな。おまえ、父親と母親はいるのかい？」

「いるよ」

行助は、この少年は集中してものを考えることの出来ないたちだな、と思いながら外を見た。このとき行助は、安から、父はいるのか、と訊かれ、七年前、母といっしょに宇野家に来た頃をおもいかえしていた。あれは、ちょうどいま頃の季節だった……。行助は小学校の四年生で、修一郎は六年生になった別れ霜の季節だった。考えてみればおかしな話だった、と行助は当時をおもいかえした。九歳と十一歳の少年が、今日からきみと僕とは兄弟だ、と言いあいながら、しかし二人の少年はそれを本当だとは思っていなかった。二人の少年のあいだで溝が出来たのは、あるいはこの最初の出発の日だったかも知れない。二人の少年は、おたがいに、父をとられ、母をとられた、と考えていたのかも知れない。……俺はあの日、修一郎を刺した日の午後、出刃を握ったまま、宇野家に来てからの年月を反芻していたのかも知れない。

三人の警官が宇野家に現われたのは、行助が成城警察署に電話をした直後だった。修一郎がベンツを運転して家を出てから十分と経っていなかった。三人のうち一人は私服だった。

「矢部行助という学生がいますか？」

と迎えにでた行助に年輩の警官が訊いた。

「矢部？……ええ、僕が矢部行助です」

行助は、咄嗟にすべてを理解した。修一郎は、女中と女中の息子に刺された、と警官に告げたにちがいない。

このとき、あたふたと澄江が出てきた。

「おい、この少年を押えていろ。矢部澄江だな。茶の間はどこだ」

その年輩の警官は、髪が乱れている澄江を見ると、いきなり靴をぬぎ式台にあがり、澄江をうながして奥に入って行った。若い警官の一人が行助の右手首に手錠をかけたのはこのときである。瞬間的な出来事だった。あわてて母に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com